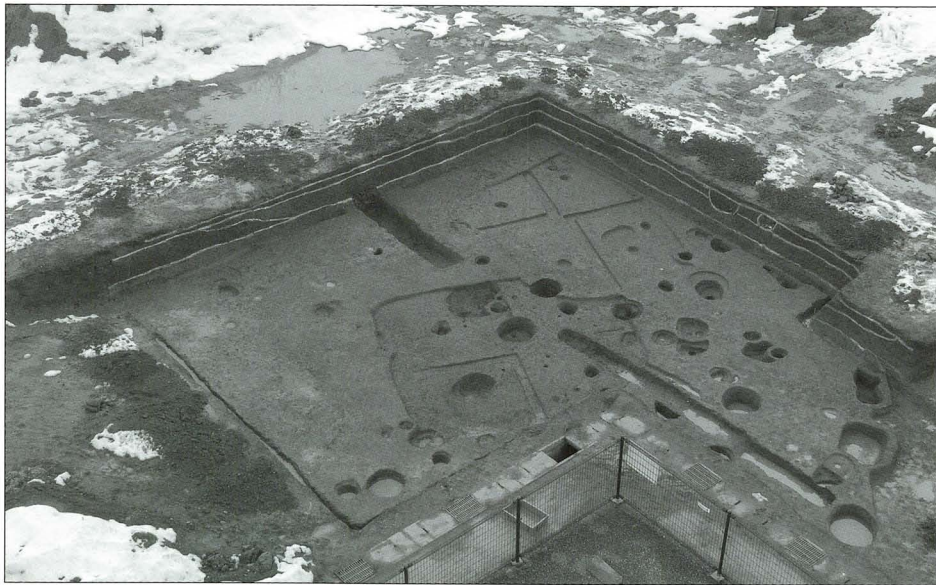


竹ヶ鼻廃寺遺跡Ⅶ

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業—



平成25年 3月

彦根市教育委員会

目 次

例言

I	はじめに	1
II	位置と環境	1
III	発掘調査の成果	7
	1 基本土層	7
	2 遺構と遺物	7
IV	おわりに	19

写真図版

例 言

1. 本書は、彦根市教育委員会が、民間の宅地造成工事に伴い、平成24年1月6日～平成24年2月3日にかけて実施した、竹ヶ鼻廃寺遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。整理調査については、平成24年4月25日～平成25年3月15日にかけて行った。
2. 本調査の調査地は、彦根市竹ヶ鼻町字石佛292番 外11筆に位置する。
3. 本調査は、彦根市教育委員会文化財部文化財課が実施した。調査の現体制は下記のとおりである。

教育長：前川 恒廣	文化財部次長（兼文化財課長）：寺田 修
文化財部長：谷口 徹	史跡整備係長：北川恭子
課長補佐（兼文化財係長）：久保達彦	副 主 査：辻 嘉光
副 主 査：深谷 覚	主 任：森下雅子
副 主 査：池田隼人	主 任：三尾次郎
主 任：林 昭男	主 任：田中良輔
主 任：戸塚洋輔	臨時職員：佃 昌幸
主 任：下高大輔	
4. 現地調査・整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：池田 寿、石田健司、上田定男、片山瀧雄、川上俊水、日下部紀男、堤 俊彦、富田芳治、野村惣三郎、松本正孝、森 義信、吉田輝一（以上、彦根市シルバー人材センター）

整理調査：中川 永（滋賀県立大学）
5. 本書で使用した遺構実測図は林が作成し、遺物実測図は佃 昌幸が作成した。
6. 本書の執筆及び編集は、林 昭男が行った。
7. 本書で使用した方位は、平面直角座標第IV系の真北に、高さは東京湾平均海面に基づいている。
8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市教育委員会にて保管している。

I はじめに

本書は、民間開発による宅地造成工事に伴って実施した竹ヶ鼻廃寺遺跡（彦根市竹ヶ鼻町字石佛292番 外11筆）の発掘調査の成果をまとめたものである。平成23年12月12日に試掘調査を実施したところ開発予定地全域（約1,727㎡）で遺物・遺構が確認されたため、開発業者と協議を行い、宅地造成工事予定地内の道路敷き部分（約321㎡）を本発掘調査の対象範囲とした。調査は、平成24年1月6日から同年2月3日まで現地で発掘調査を実施し、平成24年4月25日から平成25年3月15日まで整理調査を行ない本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、開発業者・土地所有者を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。厚くお礼を申し上げたい。

II 位置と環境

〔地理的環境〕

竹ヶ鼻廃寺遺跡は滋賀県彦根市竹ヶ鼻町に位置する古代寺院・地方官衙の比定地である。竹ヶ鼻町は彦根市のほぼ中央部を南東から北西に流れる犬上川下流の右岸微高地上に位置する。当該周辺地域は鈴鹿山系から流れる犬上川が多賀町の檜崎付近を扇頂とし、西北方向を扇の軸とする典型的な扇状地を形成する。竹ヶ鼻町から犬上郡豊郷町にかけて標高97～100



図1 竹ヶ鼻廃寺遺跡位置図

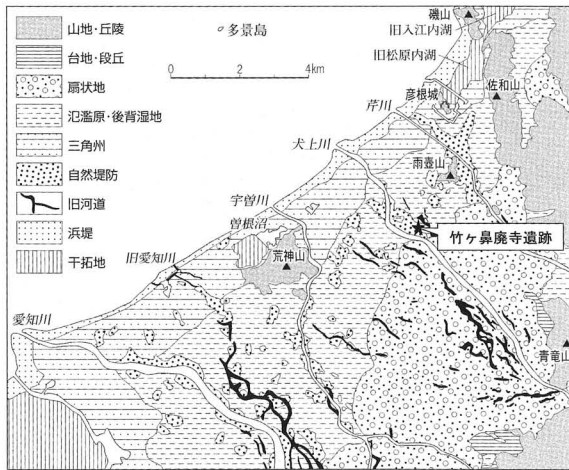


図2 彦根の自然地形（『新修彦根市史』第1巻より）

m付近を扇状地の境とするが、当遺跡はその扇状地外側の氾濫平野に位置しており、扇状地との境付近という立地条件から多くの湧水池が見られる。これらの湧水池が下流の水田の重要な水源となっている。遺跡の周囲の環境を見渡すと、北方には犬上川と同じく鈴鹿山系を源とする芹川が流れており、その両岸に鞍掛山（大堀山）と亀甲山（東山）が並んでいる。東・南方は、多賀大社・敏満寺付近の青竜山の丘陵に向かって平野が広がっており、西方は琵琶湖

岸に向かって沖積平野が形成されている。

〔歴史的環境〕

縄文時代 屋中寺廃寺で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡・敏満寺遺跡（多賀町）・小川原遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。土田遺跡・小川原遺跡では、甕棺墓や集石遺構などが確認されている。

弥生時代 前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡・北落遺跡・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが、これ以降継続するものではない。市域では竹ヶ鼻廃寺遺跡や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曾川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴住居を伴った福満遺跡がある。このように、中期以降宇曾川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌漑利用との関係が考えられる。

古墳時代 古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。同時期の湖東平野北部に広がる集落遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福満遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段の東遺跡・木曾遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などがある。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳が築造されるようになる。竹ヶ鼻廃寺遺跡周辺でも、JR 東海道線の南彦根駅と犬上川橋梁の間に「椿塚」という藪があり、鉄道敷設の際の土取で石室が発見され須恵器の出土が伝わることから後期古墳が存在した可能性が高い。ま

た、犬上川河口に位置する八坂東遺跡からは後期の埴輪が出土している。これらより、犬上川中・下流域には埋没古墳が存在する可能性がある。

白鳳～奈良時代 7世紀後半になると、新しく伝来した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が6箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺・竹ヶ鼻廃寺・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺・下岡部廃寺・普光寺廃寺である。白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらのなかに前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東2km付近に、畿内と東国を結ぶ推定古代東山道が通過しており、交通・流通面において重要な立地にあつたといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物群や、硯・石帯・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、これらより現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であつたと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

〔竹ヶ鼻廃寺遺跡の概要と既往調査〕

竹ヶ鼻廃寺遺跡は、彦根市竹ヶ鼻町の小字「上寺街道」「下寺街道」「石仏」「薬師堂」「四反地」などに所在する。現在、JR琵琶湖線南彦根駅の西南300mに位置する。周辺は犬上郡条里の北で33度東に振れる地割りや、犬上川の氾濫による不整形な地割りが広がっている。しかし、寺域と考えられる上記5つの小字の範囲ではほぼ正南北地割りであり、また当該地では昔より耕作などに伴い瓦や須恵器が表採されてきた。以上より上記5つの小字の範囲を中心に、東西、南北ともに300mの寺域が想定され、白鳳時代に創建された犬上郡最古で郡を代表する古代寺院であると考えられている。当遺跡が最初に紹介されたのは1936年滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会発行の『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』であつた。そこでは、きわめて簡潔に軒丸瓦、軒平瓦の存在が紹介された。その後『彦根市史』で更に詳しく遺跡の紹介がなされた。そこでは①古瓦の散布する地域が、竹ヶ鼻町小字下寺街道・上寺街道・薬師堂・石仏という東西・南北、おのおの約300mの範囲に及ぶこと、②かつては全面ほぼおなじ高さの畑地であつたが、瓦の分布区域を貫く東海道線敷設工事と複線工事の採土によって、現在では南側の畑地をのぞいて、それより1～1.5m低い水田となっていること、③下寺街道の一部で、北方約三反を占める旧称要法寺では現在の水田の面から約50cmの耕土を経て瓦の層に達すること、④下寺街道の地区では、今まで数個の礎石が掘り出されて、その内3個は、おのおの都恵神社・即成寺・個人宅に現存していること、⑤下寺街道では、幅1m程の粘土のたかまりが直線状に連なっていたといい、土壇の残存したものと考えられるから、建築の一つが下寺街道に建っていたことはあきらかであるということ、⑥軒丸瓦2種類、軒平瓦1種類と須恵器2点の資料紹介、⑦近世の資料に「恒河寺」があつたとある



図3 竹ヶ鼻廃寺遺跡発掘調査位置図

表1 竹ヶ鼻廃寺遺跡発掘調査一覧

調査番号	調査地／調査面積 (㎡) ／調査原因	調査期間	調査主体	主な検出遺構・遺物
1	竹ヶ鼻町樋ノ口178他 11109 (申請面積) 市道改良工事	1983年12月 ～ 1984年3月	彦根市教育委員会	竪穴住居 (古墳後期)、掘立柱建物 (時期不詳) 土師器、須恵器
2	竹ヶ鼻町四反地252-1他 6,973 (申請面積) 集合住宅建設工事	1992年8月 ～ 1993年2月	彦根市教育委員会	竪穴住居 (古墳後期)、掘立柱建物 (時期不詳) 瓦、土師器、須恵器、紡錘車、子持勾玉
3	竹ヶ鼻町282他 28,500 (申請面積) 大学村建設及び区画整理事業	1995年5月 ～ 1995年12月	彦根市教育委員会	竪穴住居 (古墳後期)、掘立柱建物・柵・井戸 (奈良・平安)、 古代の郡役所 (郡家) の遺構である可能性 瓦、土師器、須恵器、円面硯、銅匙
4	竹ヶ鼻町字北濱台159他 1790 (実質発掘調査面積) 宅地造成工事	2008年10月 ～ 2009年1月	彦根市教育委員会	溝 (古墳後期・奈良・平安)、土坑 (古墳後期・奈良・平安)、 掘立柱建物 (古墳後期・奈良・平安) 瓦、土師器、須恵器、埴輪、鉄製品、鑄造関連遺物
5	竹ヶ鼻町276-12 2.25 (実質発掘調査面積) 個人住宅建設	2009年8月	彦根市教育委員会	土坑 (江戸)・井戸 (江戸) 瓦
6	竹ヶ鼻町276-11 35 (実質発掘調査面積) 個人住宅建設	2009年10月	彦根市教育委員会	土坑 (平安)・水田 (平安～鎌倉) 瓦、土師器、須恵器
7	竹ヶ鼻町292他 321 (実質発掘調査面積) 宅地造成工事	2012年1月 ～ 2012年2月	彦根市教育委員会	竪穴住居 (古墳後期)、掘立柱建物 (奈良・平安) 溝 (奈良・平安)、土坑 (奈良・平安)、暗渠 (近世以降) 瓦、土師器、須恵器、石製品

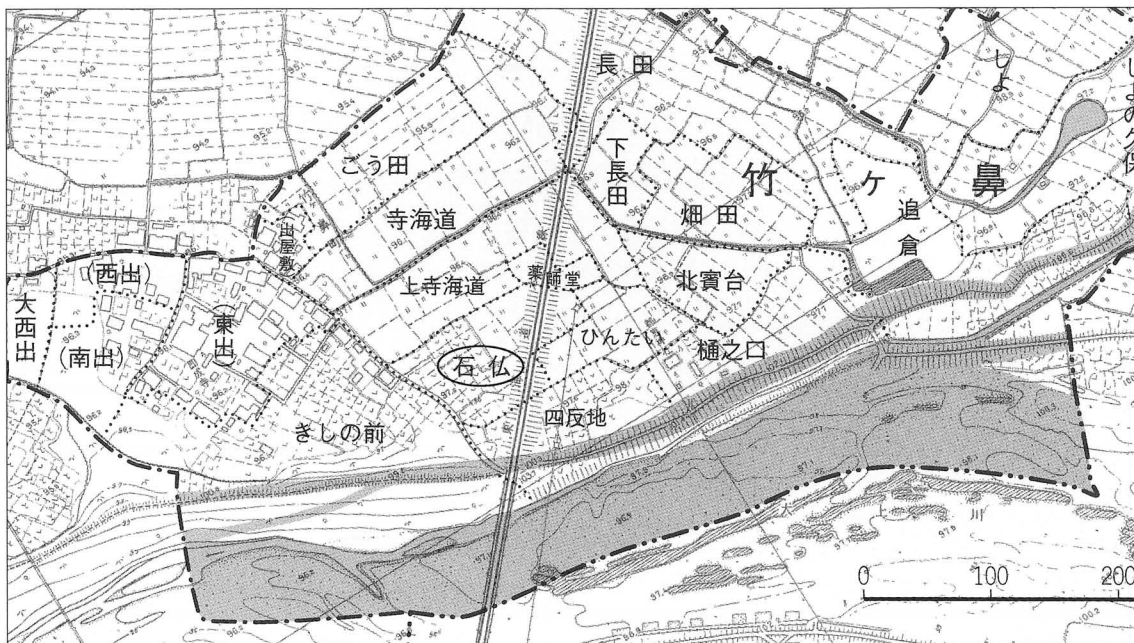


図4 竹ヶ鼻村小字図（○調査地付近）

ことなど、それまでの経緯が詳細にまとめられている。その後、今回の調査に至るまでに、彦根市教育委員会により3度にわたる発掘調査が実施された。『新修彦根市史』はそれらの新知見を踏まえ、軒瓦などについて更に詳述されている。以下、既往調査成果について概観する。

《1次調査》

竹ヶ鼻廃寺遺跡における初めての発掘調査である。昭和58年度に市道改良工事に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は今回（4次）の調査地の南西部に位置した。7世紀代の遺物を伴う竪穴建物が8棟、時期不詳の掘立柱建物が8棟検出された。寺院建立以前の集落が確認され、寺院に関わる遺構は検出されなかった。

《2次調査》

平成2年度に集合住宅建設に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は今回（4次）の調査地の南側、都恵神社の西側に位置した。古墳時代前期の遺物が伴う竪穴建物が6棟、時期不詳の掘立柱建物3棟が検出された。また、包含層から、6世紀後葉～7世紀中葉までの遺物とともに瓦類も出土した。1次調査同様、寺院関連遺構は検出されず、寺院建立以前の集落が確認された。なお、この調査では、弥生時代前期後半の遺物が竪穴建物の床面から出土している。

《3次調査》

平成7年度に大学むら建設に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は、現在のJR琵琶湖線の西側に当り、遺跡の中心部と想定される範囲であった。調査の結果、寺院関連遺構は検出されなかった。寺院跡地一帯は整地されており、その整地層を基盤層とし規模の大きな掘立柱建物群や柵列、井戸が検出された。整地層に含まれている遺物などから、

検出された遺構は奈良時代中期から平安時代と考えられているが、その規模・配列などより古代の郡役所（郡衙）である可能性が高いとされている。出土遺物では、寺院の性格を検討しうる瓦資料が多量に出土するとともに、井戸跡より青銅製の匙が出土したことが特筆される。全長23cmで、匙部は窪みが少なく先端が尖った木の葉形をしている。正倉院に調査済みの資料が保存されているが、遺跡からの出土は稀少である。

《4次調査》

平成20年度に宅地造成工事に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は現在のJR琵琶湖線の東側に当り、都恵神社の北側に位置した。調査範囲は、宅地造成工事の道路敷き部分であった。調査では古墳時代～中世前期に及ぶ遺構が検出されたが、概ね奈良時代の遺構が中心であった。主な成果としては、寺域の東境を画する区画施設と考えられるSD1を検出し、このSD1から東方では古墳時代以前の遺構が、西方では奈良時代以降の遺構密度が高かった。古墳時代以前の遺構としては掘立柱建物2棟、古墳時代後期の埴輪を出土したSD13などがある。奈良時代の遺構としては、掘立柱建物2棟、土坑、溝などを検出した。特にSK91からは銅製品の鑄造関連遺物が出土し、近辺での工房の存在が想定されている。平安時代後半～中世前期の遺構としては、灌漑用水路や畦畔遺構、瓦溜まりなど耕作に伴う土地の整理や開発の遺構が確認された。また、その他の成果として4次調査では軒丸瓦10類、軒平瓦5類など豊富な瓦資料が確認された。

《5・6次調査》

平成21年度に個人住宅建設工事に伴い、彦根市教育委員会によって実施された。調査地は、平成20年度に宅地造成工事に伴い4次調査を実施した開発地の宅地部分にあたる。6次調査で、平安時代末以降の水田が検出されている。

以上、これまでに実施された6度にわたる発掘調査について概観した。これら6次にわたる調査についてまとめると、これまでの調査では寺院関連遺構は確認されていない。しかし、寺院の性格を探る上で重要な資料である瓦をはじめとする多量の遺物が出土した。また、寺院建立以前の状況を検討しうる、古墳時代以前の遺構・遺物を確認した。なにより大きな成果は3次調査による郡衙関連遺構の確認である。このように、調査以前は、表採資料などから寺院の存在のみの想定であったが、調査を通して、寺院前後の時期の新知見を得ることができたと言えよう。

〔参考文献〕

滋賀県史蹟名勝天然記念物調査会 1936『滋賀県史蹟名勝天然記念物概要』

滋賀県立安土城考古博物館 2006『扇状地の考古学』

滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1995『八坂東遺跡』

彦根市 1960『彦根市市』上冊

- 彦根市 2007『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世
- 彦根市教育委員会 1985『竹ヶ鼻廃寺・品井戸遺跡（第4次）』彦根市埋蔵文化財調査報告第8集
- 彦根市教育委員会 1993『竹ヶ鼻廃寺発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第21集
- 彦根市教育委員会 1996『竹ヶ鼻廃寺発掘調査現地説明会資料』
- 彦根市教育委員会 2008『福満遺跡X・XI』彦根市埋蔵文化財調査報告書第40集
- 彦根市教育委員会 2010『竹ヶ鼻廃寺Ⅳ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第45集
- 彦根市教育委員会 2010『竹ヶ鼻廃寺遺跡Ⅴ・Ⅵ』彦根市埋蔵文化財調査報告書第46集

Ⅲ 発掘調査の成果

1 基本土層

調査地は、犬上川下流の右岸微高地上の標高97m前後の竹ヶ鼻町市街地に位置する。調査対象地は耕作地であるが、周辺はJR南彦根駅近郊ということもあり宅地化の激しい地域である。しかし、それら宅地化の進行している地域もかつては耕作地が広がっていた。

調査の結果、地表面から70～80cm掘り下げたところで遺構面を検出した。基本土層は、①褐灰色砂質土層（近現代耕作土）、②灰黄褐色砂質土層（近現代耕作土）、③にぶい黄褐色砂質土層（旧耕作土）、④にぶい黄橙色粘質土層（遺構面）の4層を確認した。調査区の現地地形は北から南に向かって若干標高が高くなっているが、その状況は調査で検出した遺構面でも同様で、南に向かうにつれて若干高くなっている状況が確認された。また、調査区の北側では③層と④層の間になぶい黄褐色粘質土の遺物包含層を確認している。

2 遺構と遺物

(1) 竪穴建物（SH127・SH128）

SH128（図7）

調査区南側で検出された竪穴建物。SH127に切られる形で検出した。検出高は96.6～96.7mである。平面形はほぼ隅丸正方形を呈しており、1辺4.1～4.6mを測る。検出面から竪穴床面までは10cm前後しか残存していないため、建物構築時の地表面からかなりの削平を受けていると思われる。そのためもあってか、竪穴外周辺には垂木など建物に関連すると考えられる遺構は確認できなかった。竪穴内部については、支柱穴が4箇所確認され、中央付近には炉跡と思われる焼土層、南壁中央付近では土坑が確認された。しかし、壁際溝や床面の貼土は施されていなかったようである。出土遺物は、土師器の甕（1～4）や鉢（5・6）、棒状の礫（7）が出土している。

SH127（図8）

調査区南側で検出された竪穴建物。SH128を切る形で検出した。検出高は96.6～96.7mである。平面形はやや南東側に広がる隅丸方形を呈しており、1辺3.2～3.5mを測る。SH128

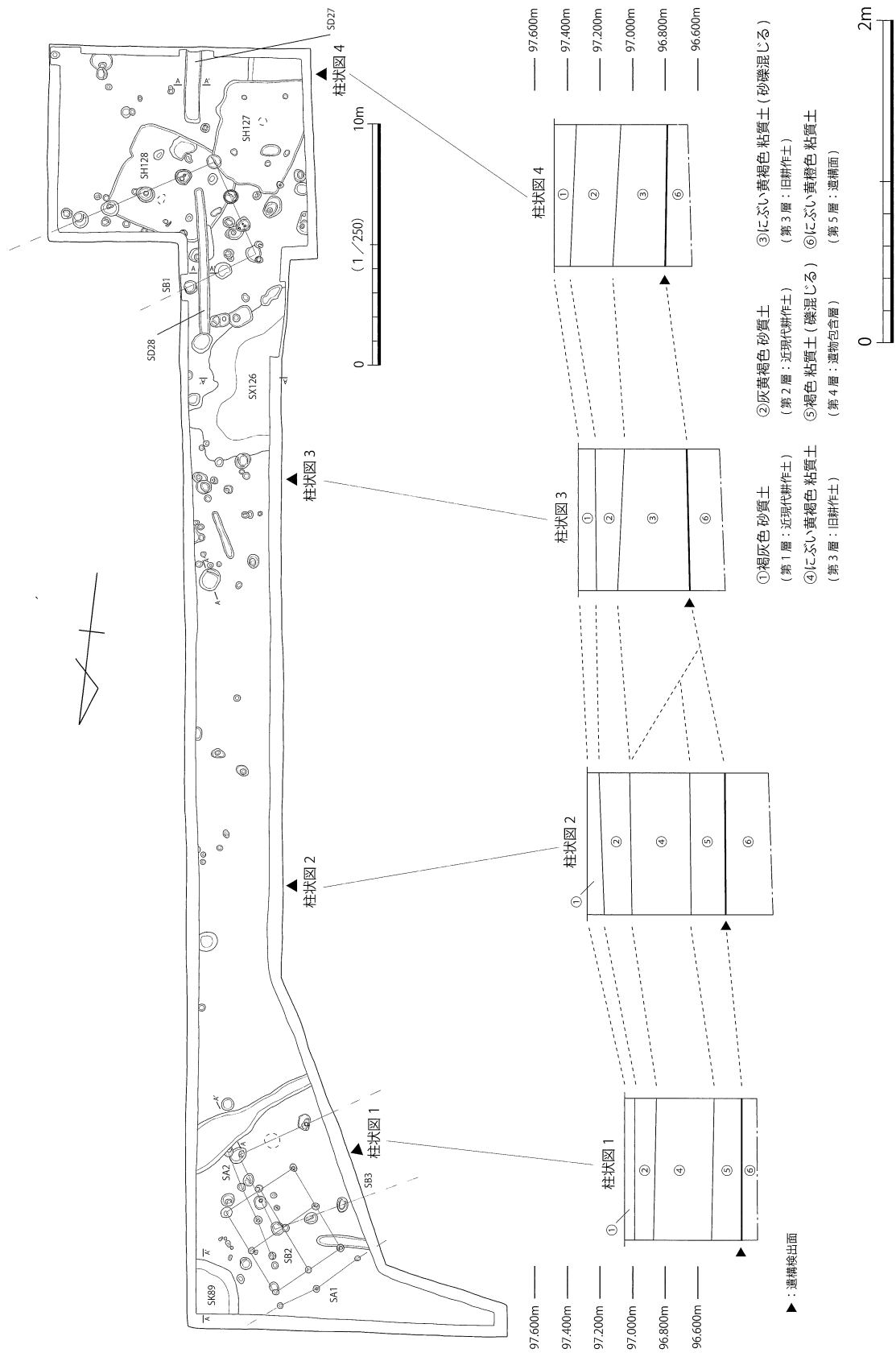


図5 遺構全図・基本層序

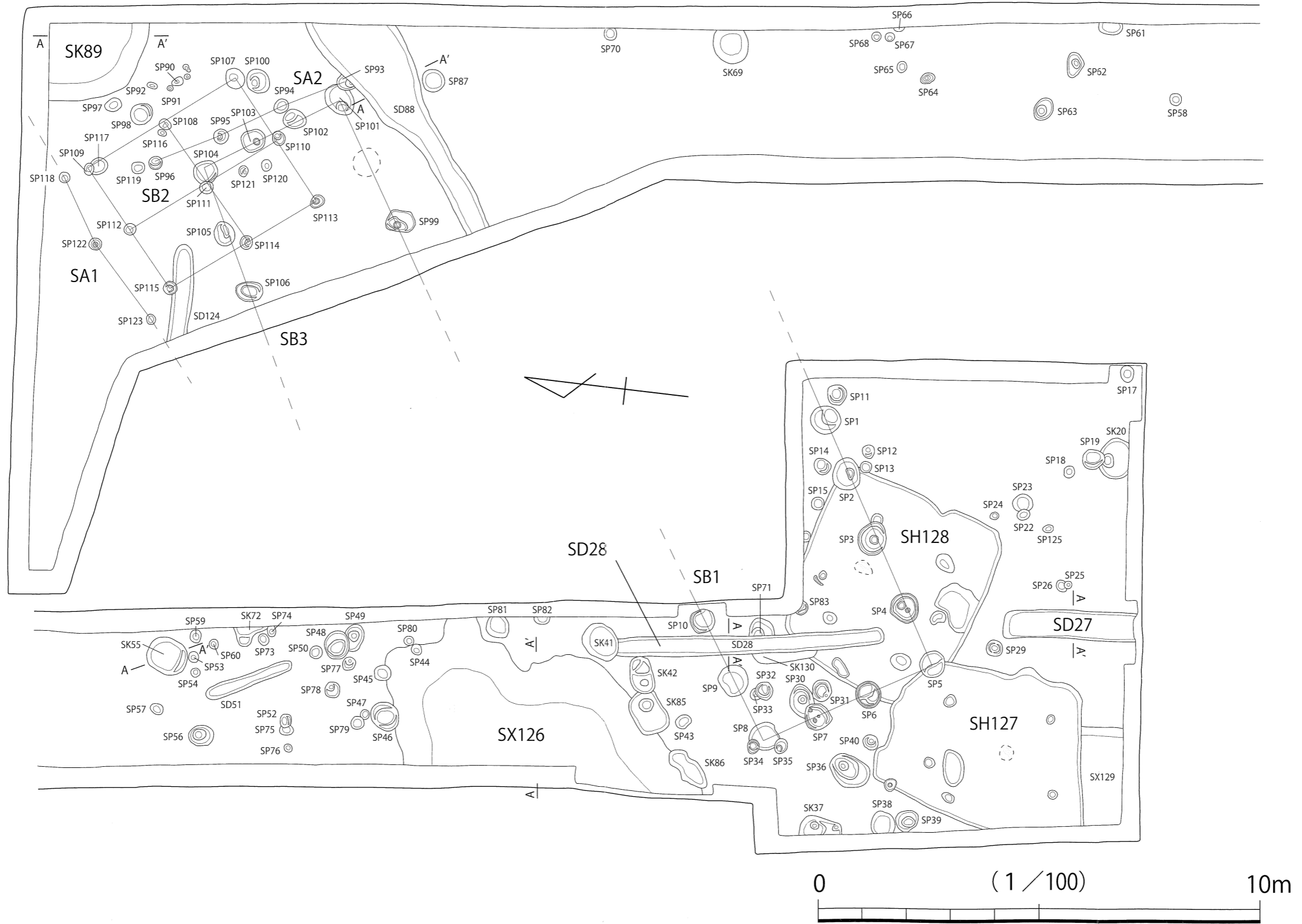


図6 遺構全図

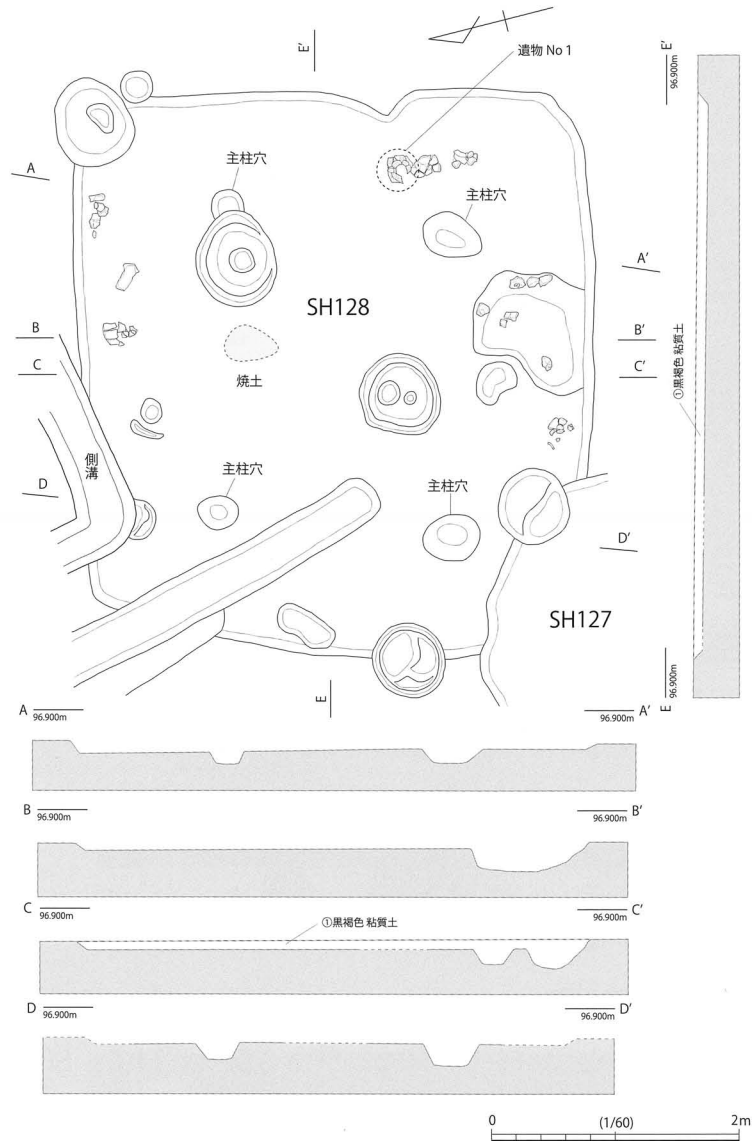


図7 竪穴建物 (SH128) 平面図・断面図

と同じく検出面から竪穴床面までは10cm 前後しか残存していないため、建物構築時の地表面からかなりの削平を受けていると思われる。竪穴外周辺には垂木など建物に関連すると考えられる遺構は確認できなかった。竪穴内部については、主柱穴が4箇所確認され、中央付近には炉跡と思われる焼土層が確認された。壁際溝や床面の貼土は施されていない。出土遺物は、土師器の高杯(8)が出土している。

(2) 掘立柱建物 (SB 1・SB 2・SB 3)

SB 1 (図 9)

調査区南側で検出された掘立柱建物で、SH128を切っている。棟の方位はN-66°-Eを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行2間(約4.1m)×桁行4間以上(約5.9m以上)の東西棟建物である。床面積は約24.19㎡以上を測る。柱間は梁側では1.3~1.6m、桁側で

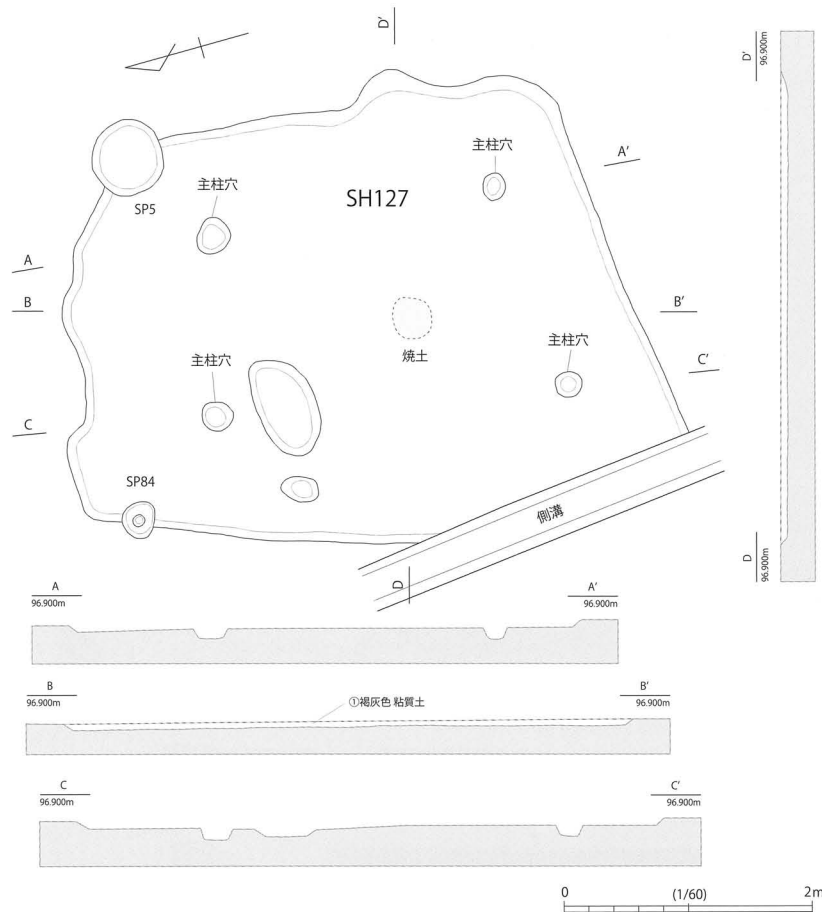


図8 竪穴建物 (SH127) 平面図・断面図

は約1.4~1.6mである。柱穴は、SP 1、SP 2、SP 3、SP 4、SP 5、SP 6、SP 7、SP 8で構成される。掘り方の平面形は円形で直径約60~70m、残存深度は19~33cmを測る。出土遺物は、SP 1から土師器の短頸壺 (9)、SP 4から土師器の甕 (10)、SP10から土師器の甕 (11)が出土している。

SB 3 (図10)

調査区北側で検出された掘立柱建物で、SB 2と重複する。棟の方位はN-74°-Eを示す。今回の調査では、調査区端にかかる形で検出されたため、建物全体のプランは判明しなかったが、検出できている範囲では梁行3間(約3.4m)×桁行2間以上(約2.9m以上)の東西棟建物である。柱間は梁側では1.0~1.3m、桁側では約1.4~1.5mである。柱穴は、SP99、SP101、SP102、SP103、SP104、SP105、SP106で構成される。掘り方の平面形は円形・楕円形で直径45~75cm、残存深度は16~41cmを測る。柱痕は平面円形で直径約20~30cmを測る。SP104から土師器の甕 (12)が出土している。

SB 2 (図11)

調査区北側で検出された掘立柱建物で、SB 3と重複する。棟の方位はN-33°-Wを示す。梁行2間(約3.6~3.8m)×桁行2間(約3.3×3.7m)の南北棟建物である。柱間は梁側で

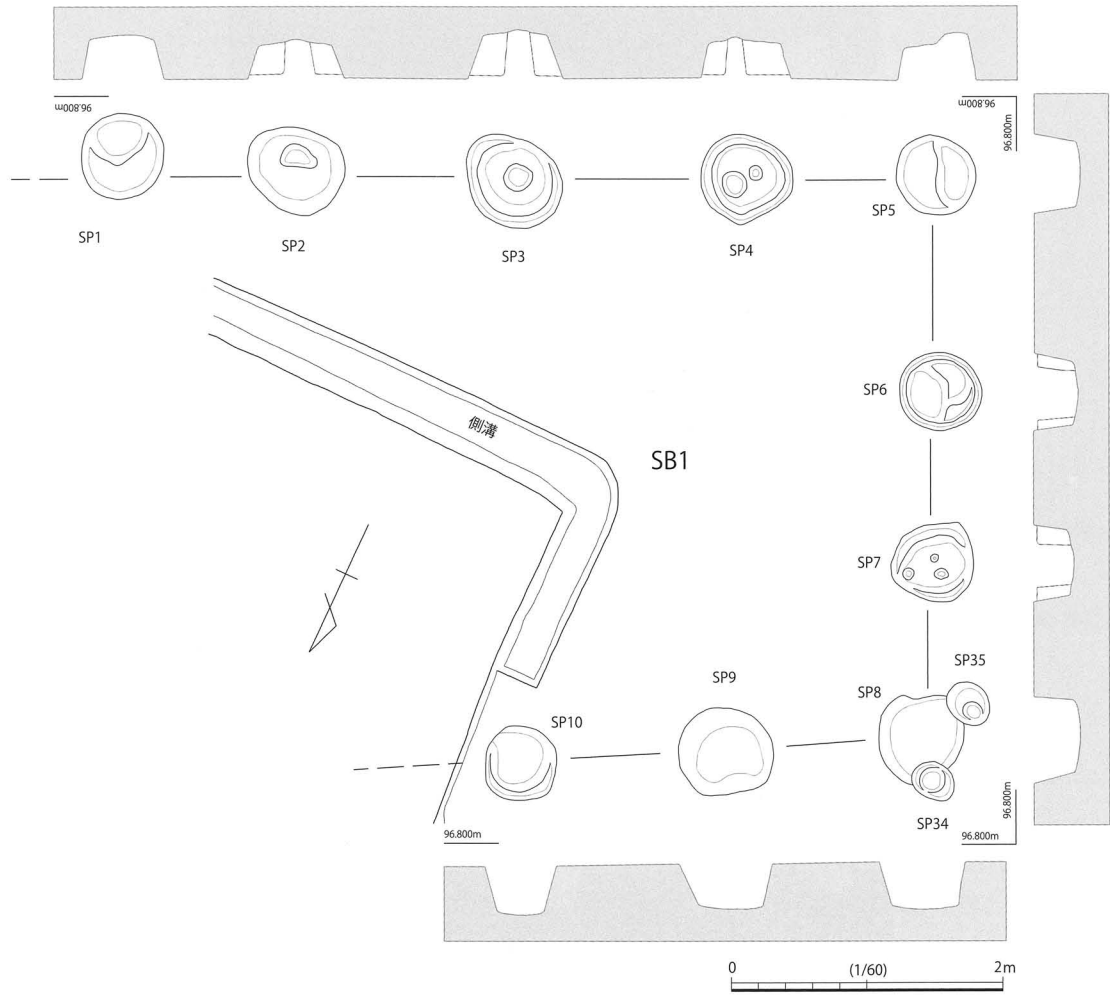


図9 掘立柱建物 (SB1) 平面図・断面図

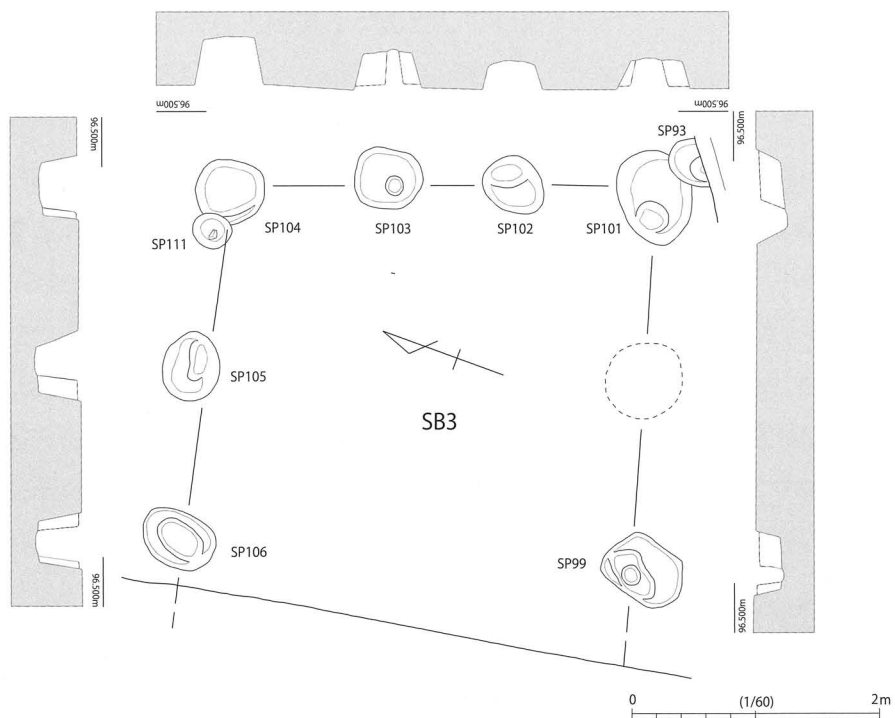


図10 掘立柱建物 (SB3) 平面図・断面図

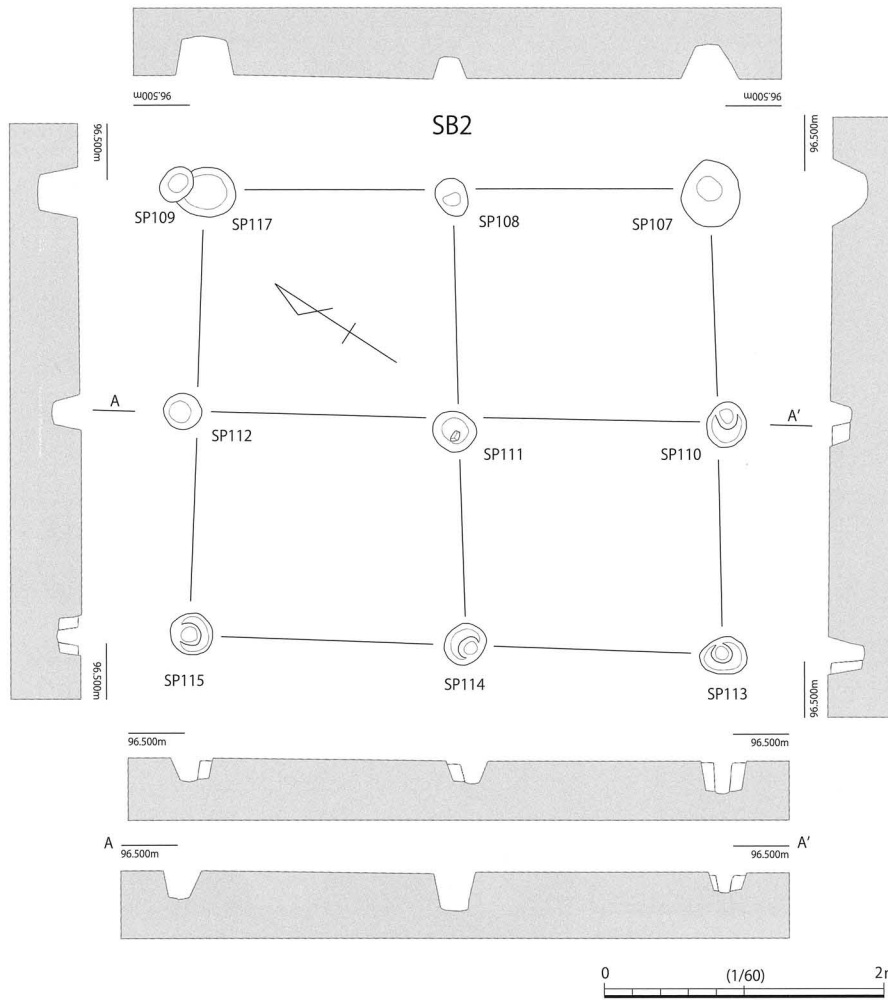


図11 掘立柱建物 (SB 2) 平面図・断面図

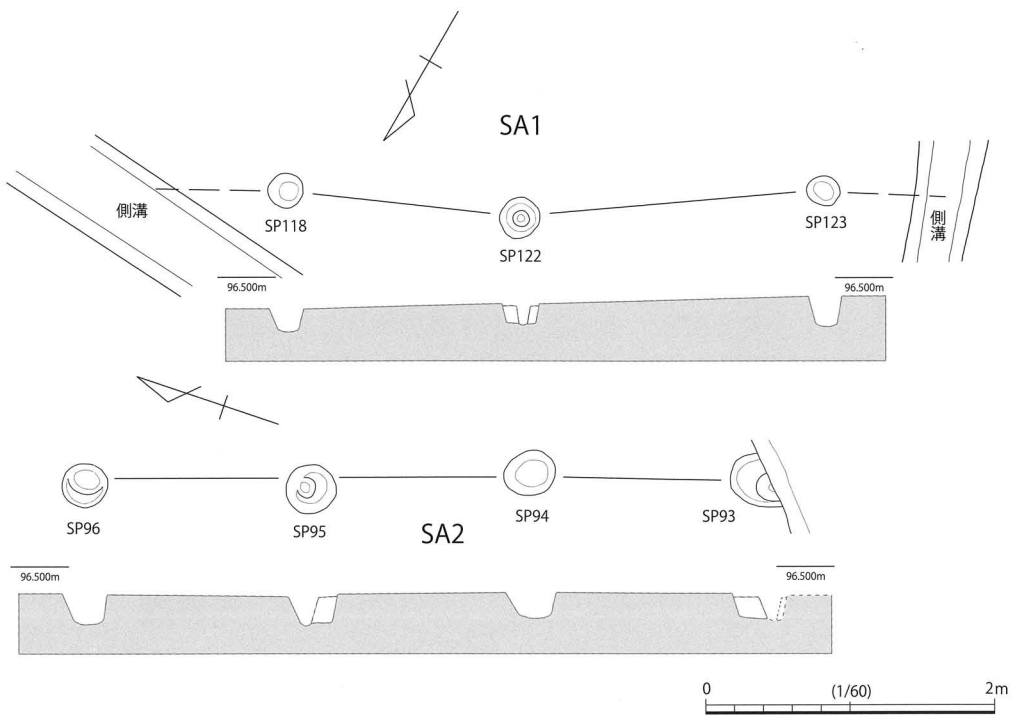


図12 柵 (SA1・SA2) 平面図・断面図

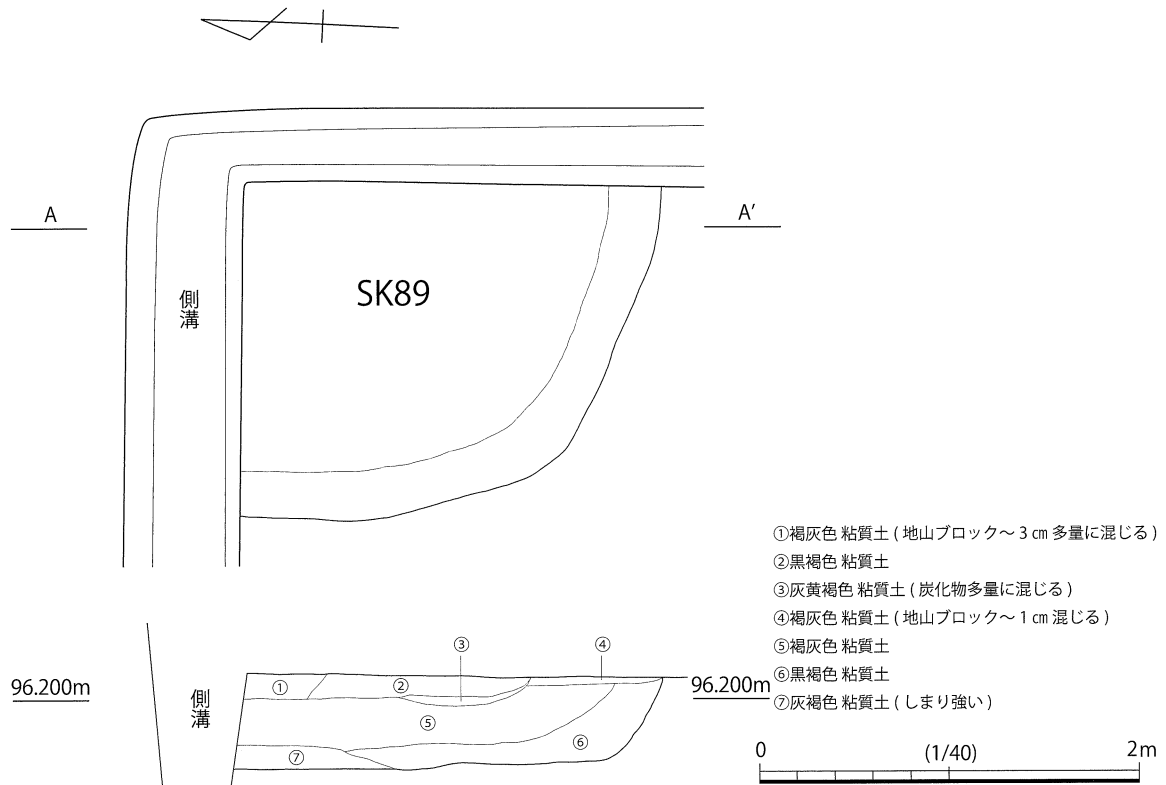


図13 土坑 (SK89) 平面図・断面図

は1.6～1.7m、桁側では約1.6～2.0mである。柱穴は、SP107、SP108、SP109、SP110、SP111、SP112、SP113、SP114、SP115で構成される。掘り方の平面形は円形・楕円形で直径30～50cm、残存深度は10～27cmを測る。柱痕は平面円形で直径約15cmを測る。図化していないがSP113とSP115から土師器片が出土している。

(3) 柵 (SA1・SA2)

SA1 (図12)

調査区北側で検出された柵で、SB2の北側に位置する。柱穴はSP118、SP122、SP123で構成され、柱間は不揃いである。掘り方は円形で直径20～30cm、残存深度6～16cmを測る。柵を構成する柱穴からの出土遺物はない。

SA2 (図12)

調査区北側で検出された柵で、SB2と重複し、SB3を構成するSP101を切る。柱穴はSP93、SP94、SP95、SP96で構成され、柱間は1.6m前後である。掘り方は円形で直径30～40cm、残存深度7cm～21cmを測る。図化していないがSP93・SP94・SP95からそれぞれ土師器片が出土している。

(4) 溝

SD88

調査区北側で検出された溝で、SB2・SB3の南側に位置する。幅は60cm～160cm、残存深度は6～10cmを測る。出土遺物は、須恵器の杯身(33)が出土している。

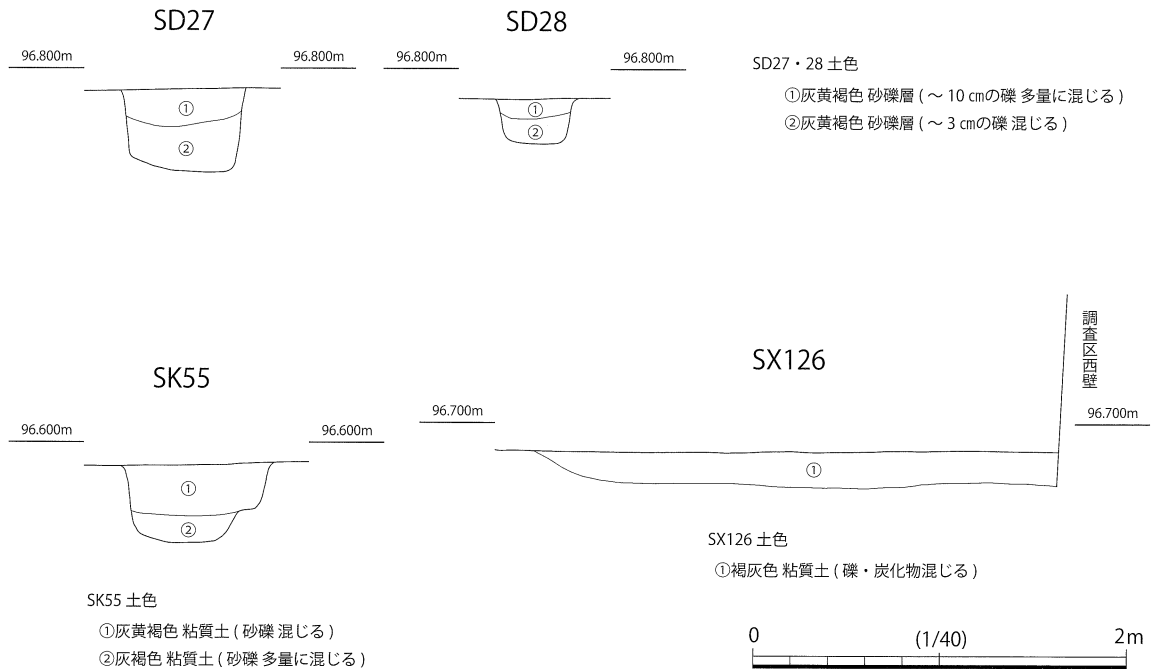


図14 各遺構 (SD27・SD28・SK55・SX126) 断面図

SD27・SD28 (図14)

調査区南側で検出された溝。いずれも各遺構を切る形で検出されており、埋土についても多量の礫や砂が充填されている。遺物は近世以降の陶磁器 (34・35) が出土している。埋土の状況などより、近世以降の暗渠排水と考える。

(5) 土坑・その他

SK55 (図14)

調査区中央付近で検出された土坑。平面形は円形であり、残存深度は約42cmを測る。出土遺物は丸瓦 (19) や平瓦が出土している。

SX89 (図13)

調査区北側で検出された土坑。調査区外まで遺構が広がっているため平面形は判然としない。残存深度は約49cmを測る。出土遺物は、土師器の壺 (20) や甕 (21)、須恵器の杯蓋 (22・23・24) や杯身 (25) が出土している。

SX126 (図14)

調査区南側で検出された落ち込み状遺構。SB 1 北側に位置する。平面形は不整形であり、出土遺物にも時期幅があるため、整地に伴う遺構と考える。出土遺物は土師器の甕 (26・27・28) や杯 (29)、須恵器の杯蓋 (30・31) や高杯 (32) が出土している。

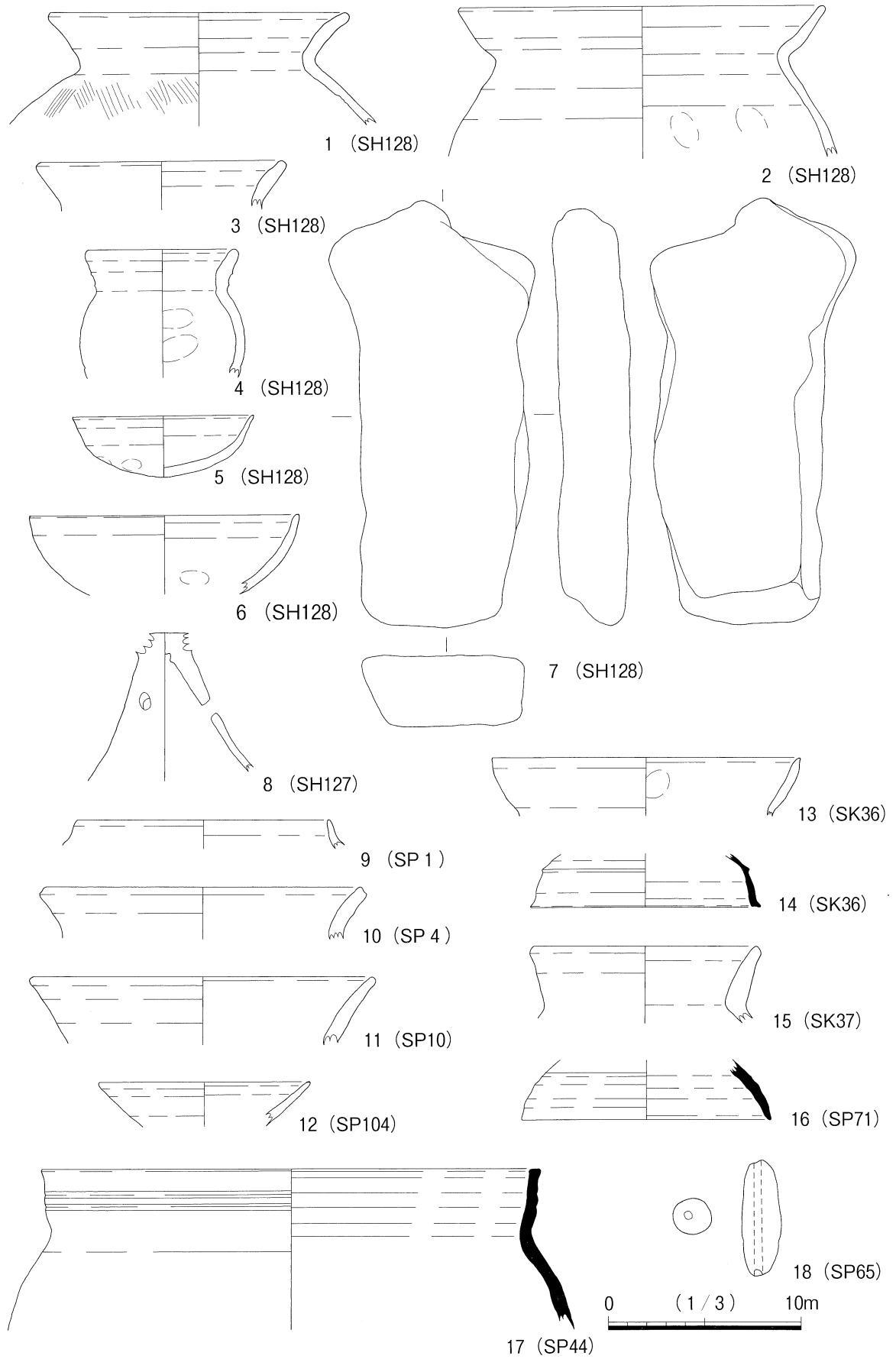


图15 出土遺物実測図 (1)

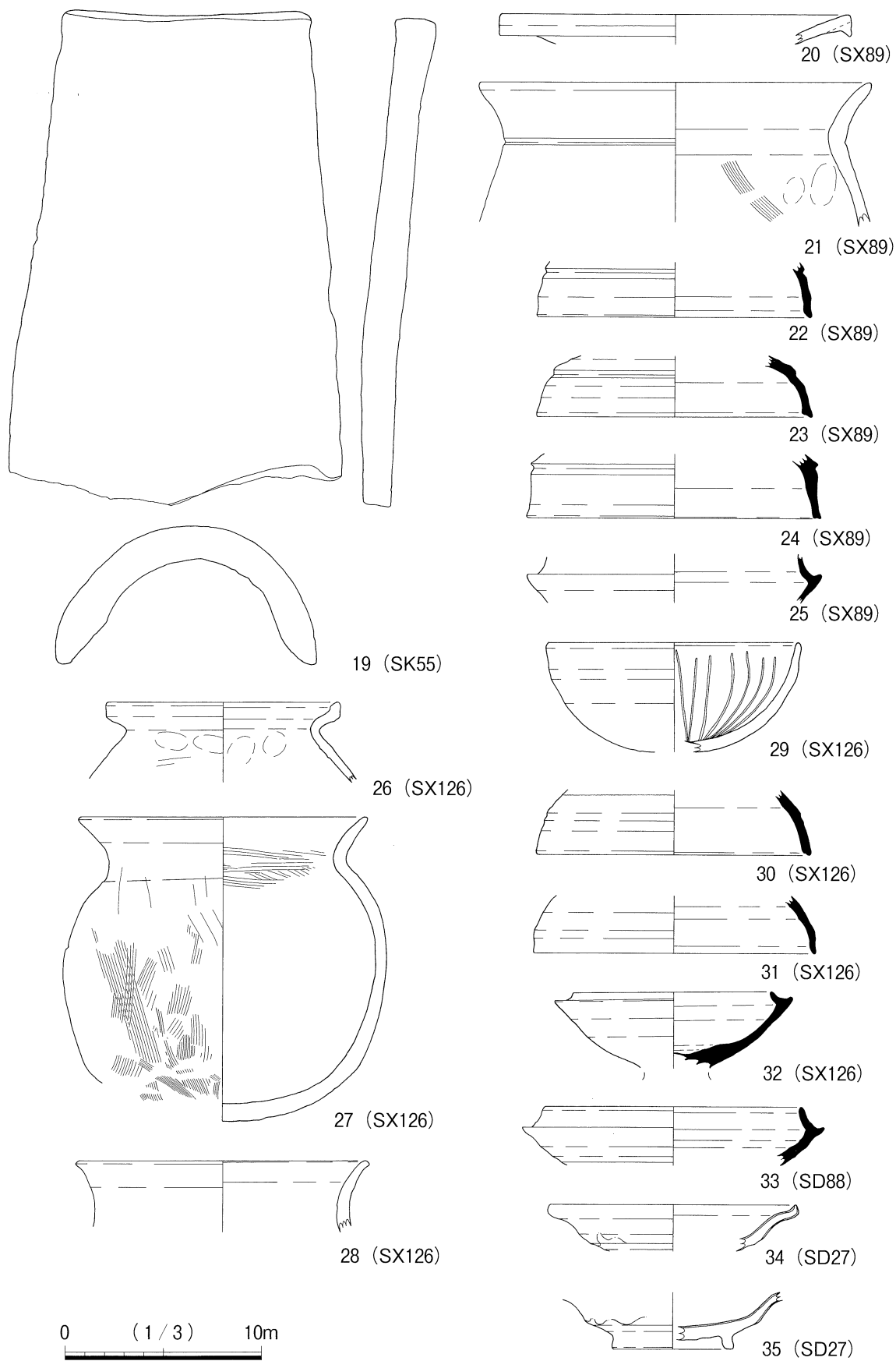


图16 出土遺物実測図 (2)

IV おわりに

竹ヶ鼻廃寺遺跡第7次調査の調査結果については前章までに報告したとおりである。今回の調査では、概ね古墳時代後期から古代にかけての遺構・遺物を検出した。以下に調査成果と検討課題を簡単に整理しまとめにかえたい。

今回の調査地は、第3次調査地の南西部小字「石仏」に位置し、以前より竹ヶ鼻廃寺の寺域に想定されている範囲内であった。そのため、寺院関連遺構の検出が想定されたが、今回の調査ではそのような関連遺構は確認されず、古墳時代後期の竪穴建物や古代の掘立柱建物などが確認された。

検出された遺構の変遷であるが、まず調査地南部の微高地に竪穴建物が営まれた。その後、周辺の整地後、掘立柱建物や柵などの古代の遺構が調査地全域に広がった。掘立柱建物の前後関係は、ほぼ同様の建物軸を持つSB1とSB3が先行し、遺構の切り合い関係よりSB2が後出する。SB1は、柱穴や建物プランの規模より、あるいは3次調査で検出された郡役所（郡衙）関連遺構との関係が想定されるが、現段階での即断は避けたい。

竪穴建物廃絶後の整地に関して、もう少し触れておきたい。整地を行ったと判断した根拠であるが、大きく2点ある。1点目は竪穴建物の検出状況である。今回検出した2棟の竪穴建物は検出面から竪穴床面まで非常に浅いため、構築時の地表面からかなりの削平を受けていると考える。その削平時期は、遺構の切り合い関係より竪穴建物廃絶後からSB1が営まれるまでの間となる。2点目は、SX126の埋没状況である。同遺構はその形状より自然地形の落ち込みと考えられ、埋土に地山ブロックを多量に含み、遺物の時期幅も広い点から、人為的に埋められたと考えられる。埋められた時期に関しても、出土遺物と遺構の切り合い関係より竪穴建物廃絶後から古代の遺構が広がるまでの間となる。以上の2点より、今回の調査地では、竪穴建物廃絶後に竪穴建物周辺の微高地が削平を受け、SX126などの地形の落ち込みが埋め立てられることにより整地が実施されたと考えられる。このような整地の状況は、第4次調査でも確認されており、当遺跡では時期は明確ではないものの、古代の段階で大規模な整地が実施された可能性が考えられる。

以上、今回の調査では、古墳時代後期から古代の様相の一端を垣間見た。しかし、古代寺院竹ヶ鼻廃寺関連の遺構は確認されず、寺院本体やその前後の時期、特に郡役所（郡衙）との関係は今後の課題である。また、今回の調査でも確認された整地に関して、その規模、実施時期、そして何に伴い実施されたのかも今後の課題である。引き続き、関連遺跡・資料の蓄積を行い調査・検討を行っていく必要がある。

〔参考文献〕

彦根市 2007『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世

彦根市教育委員会 2010『竹ヶ鼻廃寺IV』彦根市埋蔵文化財調査報告第45集

表2-1 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (cm)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SP 1	円	65.0	62.0	31.1	土師器	SB 1を構成する柱穴	9	1・2
SP 2	円	72.0	61.0	26.3	土師器	SB 1を構成する柱穴、SH128を切っている	9	1・2
SP 3	円	78.0	64.0	34.1	土師器、須恵器	SB 1を構成する柱穴	9	1・2
SP 4	円	68.0	65.0	30.7	土師器	SB 1を構成する柱穴	9	1・2
SP 5	円	62.0	56.0	33.3	土師器、須恵器	SB 1を構成する柱穴、SH127を切っている	9	1・2
SP 6	円	62.0	58.0	32.5	土師器	SB 1を構成する柱穴、SH128を切っている	9	1・2
SP 7	円	62.0	57.0	19.1	土師器	SB 1を構成する柱穴、SP30を切っている	9	1・2
SP 8	円	70.0	63.0	19.7	土師器	SB 1を構成する柱穴、SP30を切っている、SP34、SP35に切られている	9	1・2
SP 9	円	71.0	68.0	32.1	土師器	SB 1を構成する柱穴	9	1・2
SP10	円	56.0	53.0	35.9	土師器、須恵器	SB 1を構成する柱穴	9	1・2
SP11	円	43.0	42.0	21.9				
SP12	円	28.0	26.0	1.4				
SP13	円	26.0	26.0	9.4		SH128を切っている		
SP14	円	36.0	34.0	21.2				
SP15	円	30.0	27.0	11.9				
SP16	円	26.0	(14.0)	2.8	土師器			
SP17	円	36.0	30.0	16.5	土師器			
SP18	円	25.0	23.0	5.8				
SP19	円	51.0	45.0	13.1	土師器	SK20を切っている		
SK20	円	92.0	(66.0)	11.8	土師器	SP19に切られている		
SP21	円	23.0	22.0	3.9				
SP22	楕円	27.0	22.0	4.5		SP23を切っている		
SP23	円	44.0	(36.0)	9.5		SP22に切られている		
SP24	円	16.0	16.0	6.2				
SP25	円	14.0	14.0	3.2		SP26を切っている		
SP26	円	26.0	(18.0)	15.0		SP25に切られている		
SD27	—	292.0	64.0	37.2	土師器、須恵器、施釉陶器、瓦		14	3
SD28	—	697.0	39.0	26.0	土師器、須恵器、灰釉陶器、施釉陶器、瓦	SP71、SH128、SK130を切っている、SP41に切られている	14	
SP29	円	33.0	32.0	12.2	土師器			
SP30	楕円	74.0	54.0	21.3		SP 7に切られている		
SP31	円	46.0	43.0	13.8	土師器			
SP32	円	39.0	39.0	13.5	土師器	SP33を切っている		
SP33	円	26.0	(14.0)	3.1		SP32に切られている		
SP34	円	32.0	26.0	17.5	須恵器	SP 8を切っている		
SP35	円	34.0	28.0	15.0	土師器	SP 8を切っている		
SK36	楕円	93.0	68.0	32.8	土師器、須恵器			
SK37	不整	(94.0)	(43.0)	25.7	土師器			
SP38	円	(49.0)	52.0	19.3	土師器、須恵器			
SP39	円	51.0	42.0	11.2				
SP40	円	37.0	29.0	18.4	土師器			
SK41	円	92.0	74.0	35.5	土師器	SD28を切っている		
SK42	隅丸方	84.0	50.0	24.3		SK85を切っている		
SP43	円	34.0	26.0	4.8				

() 内は残存長、又は復元数値

表 2-2 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (cm)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SP44	円	24.0	23.0	13.6	土師器、須恵器			
SP45	円	38.0	34.0	19.5	土師器	SX126を切っている		
SP46	円	70.0	58.0	33.1	土師器	SX126を切っている		
SP47	円	20.0	20.0	9.6				
SP48	円	64.0	56.0	26.2	土師器	SP49を切っている		
SP49	楕円	(64.0)	42.0	24.1	土師器	SP48に切られている		
SP50	円	28.0	26.0	1.9				
SD51	—	205.0	26.0	12.9	土師器			
SP52	円	30.0	26.0	12.9		SP75を切っている		
SP53	円	23.0	21.0	8.0				
SP54	円	18.0	18.0	20.8				
SK55	円	93.0	78.0	42.5	土師器、瓦		14	3
SP56	円	55.0	46.0	18.5	土師器			
SP57	円	29.0	24.0	22.4				
SP58	円	24.0	22.0	4.1				
SP59	円	28.0	23.0	16.2				
SP60	円	20.0	18.0	2.4				
SP61	楕円	55.0	(27.0)	16.0				
SP62	楕円	54.0	36.0	14.8				
SP63	楕円	52.0	40.0	20.4	土師器、須恵器			
SP64	楕円	33.0	14.0	12.6				
SP65	円	26.0	22.0	14.5	土師器、土錘			
SP66	円	26.0	(11.0)	7.1				
SP67	円	21.0	20.0	21.6				
SP68	円	21.0	19.0	9.7				
SK69	円	(78.0)	81.0	34.5	土師器、陶器、木片			
SP70	円	30.0	(26.0)	24.7	土師器			
SP71	円	(39.0)	58.0	21.7	土師器、須恵器	SD28に切られている		
SK72	不整	66.0	46.0	17.7				
SP73	円	26.0	23.0	8.4				
SP74	円	24.0	20.0	10.4				
SP75	円	30.0	(19.0)	8.2		SP52に切られている		
SP76	円	16.0	16.0	10.6				
SP77	円	28.0	28.0	15.1				
SP78	円	34.0	34.0	13.0				
SP79	円	28.0	27.0	19.3	土師器、瓦			
SP80	円	20.0	19.0	6.8				
SP81	円	(58.0)	52.0	18.8	土師器			
SP82	円	29.0	(27.0)	14.0	土師器			
SP83	円	31.0	16.0	8.3	土師器			
SP84	円	29.0	28.0	21.1				
SK85	隅丸長方	101.0	71.0	27.0	土師器			
SK86	不整	109.0	49.0	22.4	土師器			
SP87	円	51.0	49.0	7.0				
SD88	—	549.0	115.0	5.8	土師器、須恵器			

() 内は残存長、又は復元数値

表2-3 遺構一覧

遺構	平面形	規模 (cm)			出土遺物	備考	挿図	写真 図版
		長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SK89	—	(238.0)	(178.0)	48.8	土師器、須恵器		13	2
SP90	楕円	26.0	19.0	6.3				
SP91	円	13.0	13.0	1.8				
SP92	楕円	23.0	11.0	8.8				
SP93	楕円	(28.0)	39.0	7.7	土師器	SA 2を構成する柱穴、SP101を切っている、SD88に切られている	12	3
SP94	円	36.0	30.0	17.7	土師器	SA 2を構成する柱穴	12	3
SP95	円	35.0	34.0	21.3	土師器	SA 2を構成する柱穴	12	3
SP96	円	31.0	31.0	8.3		SA 2を構成する柱穴	12	3
SP97	楕円	38.0	28.0	17.4	土師器、須恵器、施釉陶器			
SP98	円	52.0	46.0	19.1				
SP99	不整	67.0	48.0	22.3	土師器	SB 3を構成する柱穴	10	3
SP100	円	53.0	50.0	17.1				
SP101	楕円	77.0	60.0	22.0		SB 3を構成する柱穴、SP93に切られている	10	3
SP102	円	53.0	44.0	16.4		SB 3を構成する柱穴	10	3
SP103	円	55.0	49.0	35.4	土師器、須恵器	SB 3を構成する柱穴	10	3
SP104	円	56.0	(53.0)	41.1	土師器、須恵器	SB 3を構成する柱穴、SP111に切られている	10	3
SP105	円	57.0	46.0	36.7	土師器	SB 3を構成する柱穴	10	3
SP106	楕円	61.0	45.0	37.5	土師器	SB 3を構成する柱穴	10	3
SP107	円	48.0	42.0	23.4		SB 2を構成する柱穴	11	3
SP108	円	28.0	22.0	10.7		SB 2を構成する柱穴	11	3
SP109	円	28.0	22.0	16.2		SP117を切っている		
SP110	円	33.0	28.0	14.1		SB 2を構成する柱穴	11	3
SP111	円	31.0	28.0	26.9		SB 2を構成する柱穴、SP104を切っている	11	3
SP112	円	28.0	26.0	20.8		SB 2を構成する柱穴	11	3
SP113	円	33.0	26.0	27.3	土師器	SB 2を構成する柱穴	11	3
SP114	円	31.0	27.0	12.0		SB 2を構成する柱穴	11	3
SP115	円	32.0	29.0	16.3	土師器	SD124を切っている		
SP116	円	18.0	13.0	5.8				
SP117	円	(32.0)	38.0	28.1		SB 2を構成する柱穴、SP109に切られている	11	3
SP118	円	24.0	23.0	11.9		SA 1を構成する柱穴	12	3
SP119	円	28.0	24.0	16.8				
SP120	円	22.0	20.0	24.2				
SP121	円	22.0	21.0	10.7				
SP122	円	29.0	26.0	16.4		SA 1を構成する柱穴	12	3
SP123	円	22.0	19.0	6.3		SA 1を構成する柱穴	12	3
SD124	—	(220.0)	45.0	10.2	土師器、須恵器			
SP125	円	23.0	16.0	4.4				
SX126	不整	(778.0)	(507.0)	20.4	土師器、須恵器	SP45・46、SK85・86に切られている	14	
SH127	隅丸方	462.0	381.0	12.7	土師器	SH128、SX129を切っている、SP 5に切られている	8	2
SH128	隅丸方	450.0	(411.0)	10.7	土師器、石製品	SP 2・5・6・13、SD28、SH127、SK130に切られている	7	1・2
SX129	—	(221.0)	(89.0)	9.0	土師器	SH127に切られている		
SK130	—	146.0	(25.0)	1.3		SH128を切っている、SD28に切られている		

() 内は残存長、又は復元数値

表3 竪穴建物一覧

建物	平面形状	長辺×短辺	深さ	桁行長 (m)	床面積 (㎡)	主軸方位	挿図	写真図版
SH127	隅丸方形	3×4 (以上)	4.1	5.9 (以上)	24.19 (以上)	N-12°-E	7	1・2
SH128	隅丸方形	2×2	3.6~3.8	3.3~3.7	11.88~14.06	N-15°-E	8	1・2

表4 掘立柱建物一覧

建物	梁行×桁行 (間)	梁行長 (m)	桁行長 (m)	床面積 (㎡)	主軸方位	挿図	写真図版
SB1	3×4 (以上)	4.1	5.9 (以上)	24.19 (以上)	N-66°-E	9	1・2
SB2	2×2	3.6~3.8	3.3~3.7	11.88~14.06	N-33°-W	11	3
SB3	3×2 (以上)	3.4	2.9 (以上)	9.86	N-74°-E	10	3

表5 掘立柱建物・柵柱穴一覧

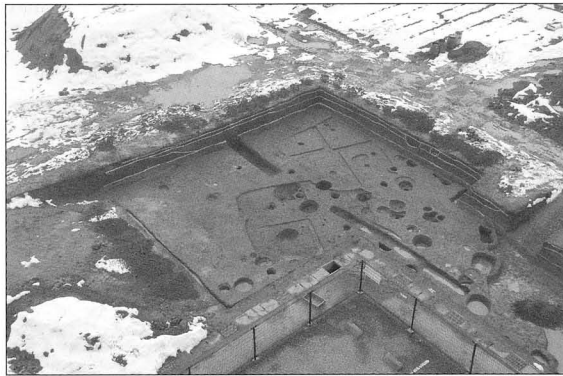
建物	遺構	平面形	規模 (cm)			出土遺物	備考	挿図	写真図版
			長さ (長幅)	幅 (短幅)	深さ				
SB1	SP1	円	65.0	62.0	31.1	土師器		9	1・2
	SP2	円	72.0	61.0	26.3	土師器	SH128を切っている	9	1・2
	SP3	円	78.0	64.0	34.1	土師器、須恵器		9	1・2
	SP4	円	68.0	65.0	30.7	土師器		9	1・2
	SP5	円	62.0	56.0	33.3	土師器、須恵器	SH127を切っている	9	1・2
	SP6	円	62.0	58.0	32.5	土師器	SH128を切っている	9	1・2
	SP7	円	62.0	57.0	19.1	土師器	SP30を切っている	9	1・2
	SP8	円	70.0	63.0	19.7	土師器	SP30を切っている、SP34、SP35に切られている	9	1・2
SB2	SP107	円	48.0	42.0	23.4			11	3
	SP108	円	28.0	22.0	10.7			11	3
	SP109	円	28.0	22.0	16.2		SP117を切っている		
	SP110	円	33.0	28.0	14.1			11	3
	SP111	円	31.0	28.0	26.9		SP104を切っている	11	3
	SP112	円	28.0	26.0	20.8			11	3
	SP113	円	33.0	26.0	27.3	土師器		11	3
	SP114	円	31.0	27.0	12.0			11	3
SB3	SP99	不整	67.0	48.0	22.3	土師器		10	3
	SP101	楕円	77.0	60.0	22.0		SP93に切られている	10	3
	SP102	円	53.0	44.0	16.4			10	3
	SP103	円	55.0	49.0	35.4	土師器、須恵器		10	3
	SP104	円	56.0	(53.0)	41.1	土師器、須恵器	SP111に切られている	10	3
	SP105	円	57.0	46.0	36.7	土師器		10	3
	SP106	楕円	61.0	45.0	37.5	土師器		10	3
SA1	SP118	円	24.0	23.0	11.9			12	3
	SP122	円	29.0	26.0	16.4			12	3
	SP123	円	22.0	19.0	6.3			12	3
SA2	SP93	—	(28.0)	39.0	7.7	土師器	SP101を切っている、SD88に切られている	12	3
	SP94	円	36.0	30.0	17.7	土師器		12	3
	SP95	円	35.0	34.0	21.3	土師器		12	3
	SP96	円	31.0	31.0	8.3			12	3



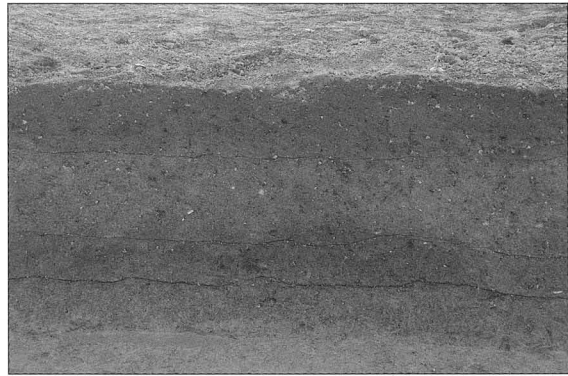
調査前風景〔南より〕



調査区完掘状況〔南より〕



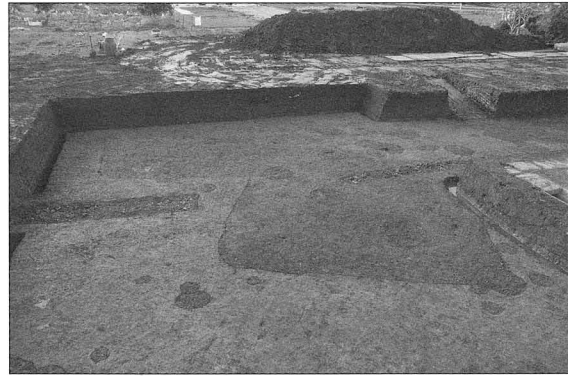
調査区南部完掘状況〔北東より〕



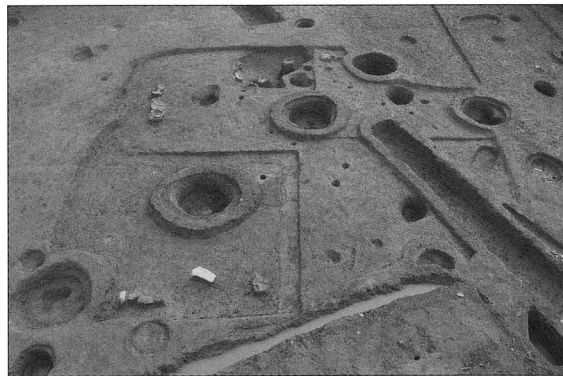
基本土層〔柱状図1地点：東より〕



基本土層〔柱状図4地点：東より〕



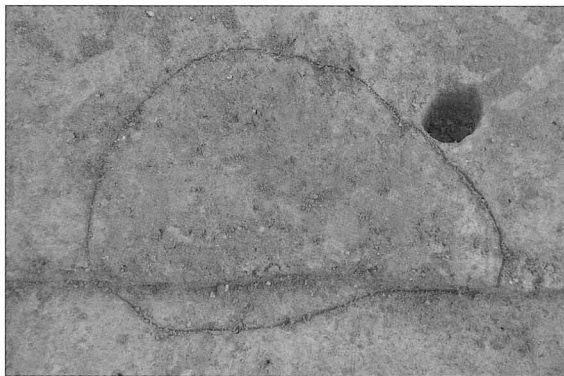
SH127・SH128 検出状況〔東より〕



SH128 完掘状況〔北より〕



SB1・SH128 完掘状況〔南西より〕



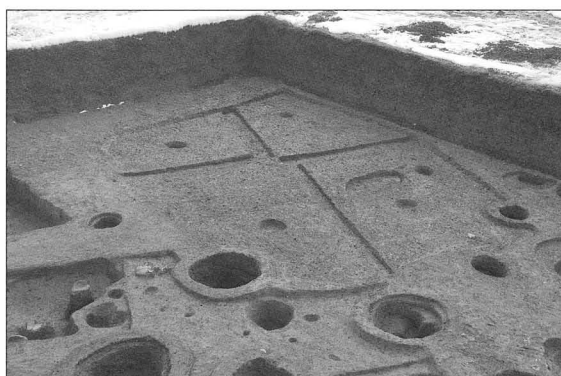
SH128内 焼土層〔西より〕



SH128内 土坑完掘状況〔北より〕



SH128内 土器出土状況〔遺物 No1 北西より〕



SH127 完掘状況〔北東より〕



SH127内 焼土層〔北より〕



SX89 土層断面〔西より〕



SB 1 検出状況〔南西より〕



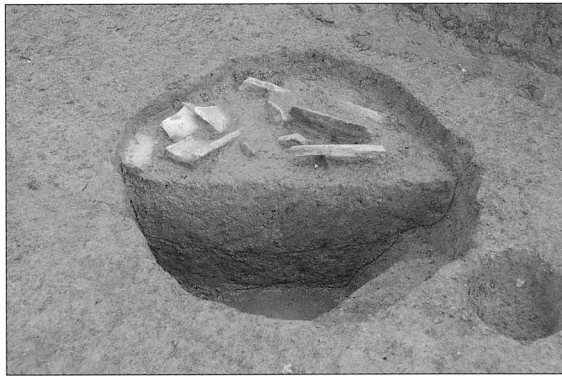
SB 1 完掘状況〔南西より〕



SB 2・SB 3 検出状況〔西より〕



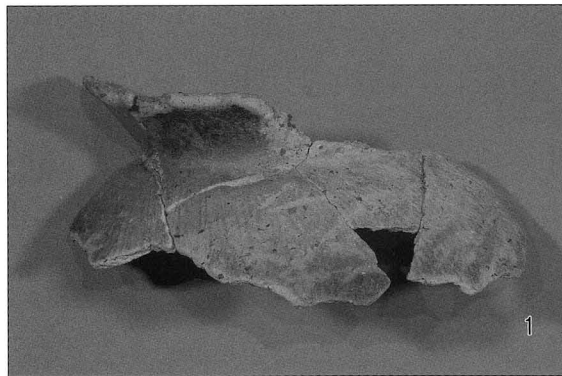
SB 2・SB 3 完掘状況〔南西より〕



SK55 土層断面〔西より〕



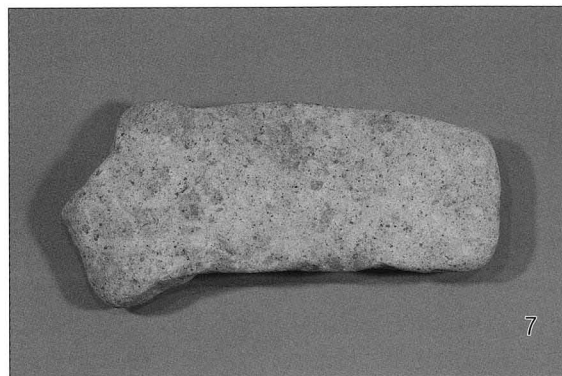
SD27 土層断面〔北より〕



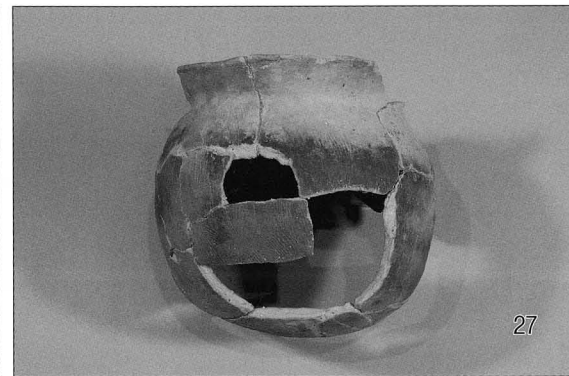
SH128 出土遺物



SH128 出土遺物



SH128 出土遺物



SX126 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	たけがはなはいじいせき							
書名	竹ヶ鼻廃寺遺跡Ⅶ							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業							
巻次								
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	54							
編著者名	林 昭男							
編集機関	彦根市教育委員会 文化財部 文化財課							
所在地	〒522-0001 彦根市尾末町1番38号 TEL0749-26-5833							
発行年月日	20130331							
しょしゅういせき 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
たけがはなはいじ 竹ヶ鼻廃寺 いせき 遺跡	ひこねし 彦根市	25202	014	35度	136度	321㎡	20120106 ～ 20120203	宅地造成
	たけがはな 竹ヶ鼻			14分	14分			
	ちょう 町292			32秒	36秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
竹ヶ鼻廃寺 遺跡	集落	古墳後期・古 代	竪穴住居・ 掘立柱建物 ・溝・柱穴・ 土坑	土師器・須恵 器・石製品・ 瓦				

彦根市埋蔵文化財調査報告第54集

竹ヶ鼻廃寺遺跡Ⅶ

—宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業—

平成25年（2013年）3月発行

編集・発行：彦根市教育委員会文化財課
滋賀県彦根市尾末町1番38号
TEL0749-26-5833

印刷・製本：西濃印刷株式会社
岐阜県岐阜市七軒町15番地
TEL058-263-4101

TAKEGAHANA
ABANDONED TEMPLE

March, 2013

Hikone Educational Bureau
Cultural Asset Division